

集会宣言

住民への説明がない中での立野ダム本体建設工事着工に断固反対する

2012年7月12日の九州北部豪雨から6年が経過しました。その後の大規模な河川改修で、白川は大洪水でもあふれない川になりました。さらに、上流の阿蘇市には7つの遊水地が完成、もしくは建設されようとしています。

今回の西日本豪雨では、ダムは想定以上の洪水では満水になり、ダムへの流入量をそのまま下流に流すしかなくなり洪水調節できなくなる点や、ダムがない場合に比べ洪水の水位も急激に上昇することが浮き彫りになりました。異常気象で「想定外」が想定外でなくなり、「何年に一度」という計画規模があてにならなくなった近年の豪雨を考えると、ダムは洪水調節で有効な選択肢どころか危険です。

2016年の熊本地震で、立野ダム建設予定地の両岸は大きく崩壊し、ダム水没予定地の大半が崩れました。現在も、ダム建設予定地周辺の崩落した山肌のは大半は放置されたままです。多くの住民が「こんな危険な場所にもうダムは造られない」と思いましたが、国土交通省は立野ダムの本体建設工事に2018年8月5日に着手すると報道されました。

立野ダムは、建設予定地が崩れやすい火山性の地質であること、活断層が存在する地帯であること、洪水時に流木や土砂によりダム下部に設けられる幅5m×高さ5mの放流孔（穴）がふさがり洪水調節できなくなること、ダム満水時に土砂崩壊が起こればダム津波が下流を襲うなどの危険性があります。

一方、多くの住民が立野ダム建設の内容について知らされていないという中で、ていねいな住民説明会を求めてきましたが、国土交通省は全く開催しないままにダム本体建設工事に着手しようとしています。また住民団体からの9回の公開質問状にも全く答えていないという不誠実な対応です。白川流域の多くの自治体住民にとって極めて重要な問題であるにもかかわらず、情報の周知と議論がなされないまま危険なダムを建設することは、熊本の将来にとって大きな禍根を残すこととなります。

九州北部豪雨6周年「立野ダムと白川の安全を考えるシンポジウム」に参加した私たちは、基調講演で語られたように真の治水は伝統的技術の蓄積の中にあること、そして“治水の王道”は堤防と遊水地にあることを再認識し、白川流域の安全を守る立場から、このような危険な立野ダム本体工事着工に断固反対し、国土交通省及び熊本県に対し以下のことを強く要請します。

1. 立野ダムは危険なダムであり、本体工事着工を中止し、流域住民への丁寧な説明会を早急に実施すること。
2. 河川整備の充実と維持管理で白川の洪水を防ぐことは可能であり、引き続きその充実と維持管理に努めること。

2018年7月22日

九州北部豪雨6周年「立野ダムと白川の安全を考えるシンポジウム」参加者一同